

4 授業「自分以下を求める心」校内授業研究会

(1) 【指導案】

同 和 問 題 (道 徳) 学 習 指 導 案

1991年4月30日(火) 5校時

3年B組 指導者 森口 健司

① 主 題 人間らしい生き方を求めて

② 主題設定の理由

いよいよ義務教育最後の学年を迎えた。この最後の1年、すべての生徒に、一人一人の人間としての生き方に関わって同和問題をとらえさせたいと思う。昨年、本クラスの生徒は、学年一丸となって同和問題の学習に取り組む機会に恵まれた。すべてのクラスが、他のクラスの生徒の見つめる中で、同和問題に対する一人一人の思いを語り合い、その思いを土台として、学年全体で同和問題に関わる生き方を深める学習に取り組んできた。その取り組みの中で、学年全体が「私の目を見て！」の学習に取り組んだとき、その授業の最後の場面で、A子が必死に自分の中にあるもやもやした思いを語ろうとした。しかし、さまざまな思いがこみ上げていく中で、涙が溢れその発言は言葉にはならなかった。その思いは私には痛いほどわかった。その授業は、その発言で終わったが、授業の後、何人かの生徒がA子のそばに寄り添い、一人一人の思いを語り合う状況が生まれた。その場面を見たとき、私は本校において、生徒一人一人が同和問題を主体的に自分自身の生き方に関わる問題として、とらえ学んでいこうとする集団ができてきたと思った。その話し合いの中心にいたB子は翌日の生活ノートに次のような文章を記してきた。

『今日2年D組の公開授業がありました。最後にA子さんが泣きました。あとで理由を聞いてみると、前に美術の時間、A子さんは自分が部落出身であることをみんなの前で言ったそうです。A子さん自身、隠しておくのがいやで、そしてみんなにわかってもらいたかったらしいです。それからみんなに違う目で見られているようで怖いそうです。今日の授業のときも、みんなにわかってほしくてそのことを言おうとしたけど、涙が出てきて言えなかったと言っていました。I子さんやS子さん、M子さん、K子さん、N子さんなど、みんながA子さんのそばでいると、A子さんが、「I子さん、私のこと違う目で見たことある」と聞きました。I子さんは、正直に、「ごめん、今まで違う目で見たことがあったかもしれん・・・。けど、頑張ってなおすけん、何でも私に言うてきて・・・」そう言いました。A子さんは、少し泣きやみました。「私、もう同和問題の勉強したあない」A子さんが言いました。みんな、一瞬考えました。私は、「A子さんみたいにつらい思いをする人がいないように学習しよう」と言ったけど、後でけっこう考えた。もし、同和問題の勉強をしなければ、自分の子どもに何も教えてあげることができない。そのままにしておいたらどうだろう。何も知らずに育って友だちをつくって、そうしたら差別はなくなるかもしれない。本当にそれでなくなるものだろうか。正直に言って自分の心から、差別の心を全くなくすことは、私にはできないと思う。部落差別がなくなっても、やっぱり自分以下を求める心は残るだろうなあと思う。

そのために、部落差別やいろいろな差別。自分の中にある差別心。自分以下を求めているとする情けない心。そんな思いを美しくしていくために同和問題の学習は、大切に続けていかなければならないと思う。

私は、口先だけで、差別はいけない、差別をなくそうと言うてきた。また、いろんな資料をつかって学習してきたけど、今日、A子さんの涙を見て、A子さんの訴えを聞いて、はじめて、本当に部落差別を知った。すごくつらかった情けなかった。このことは、だれかが言うてくれなかったら、わからなかったことだと思う。そのだれかにA子さんがなってくれたこと、A子さんにありがとうが言いたい。私は大事な何かを知らんと大人になるとこだった。みんなも、今日のことで本当にわかったと思う。A子さんの質問に戸惑いながらも一生懸命に答えていたI子さん。たったまま一生懸命話を聞いていたK子さん、M子さん。最後に「A子さんが悪くない、悪いのは部落差別をつくった人間じゃ」と言っていたN子さん。みんないい友だちです。

今日の帰りK子さんとも、今まで話し合ったこともなかった部落差別について考えました。もうすぐテストです。みんなで頑張りたい。』

本学級には、9名の対象地区生徒がいる。A子を初めとするすべての対象地区生徒の悲しみを、みんなで幸せに変えていきたい。そのために、生徒一人一人の中に生きて働く力となる同和問題学習を徹底的に実践していかなければならない。

昨年度より始まった本学年での同和問題学習の営みが、学校全体の取り組みとなっていくことを願い、平成3年度授業研究のスタートとして「自分以下を求める心」の学習に取り組んだ。「自分以下を求める心」この資料は、生徒一人一人の生活に関わって明確に差別をとらえることができる資料である。

本資料「自分以下を求める心」にえがかれた思いは、だれの心の中にも潜んでいる。つらいとき人はもつとつらい思いをしている人をさがす。苦しいとき、人はもつと苦しみのどん底にいる人を思い自分を慰めていく。差別を受けたとき、自分よりもつと厳しく虐げられ差別のどん底で苦しみもがいている人を思い、自分はその人たちよりまだましなんだと思う。そして、自分を守るために、自分を慰めるためにその人たちをより虐げ差別していく。この思いは生徒たちの日々の暮らしの中にもその思いは如実に現われてくる。テストが帰ってきたとき、その点数が悪くとも、隣の生徒の点数がもつと悪いとほっとする。その反対にテスト結果がよくても、隣の生徒の点数が同じようによかったら、その喜びは半減していく。仲間の悲しみを共有したり、仲間の喜びを共に喜ぶことがなかなかできない。私たちはまさしく差別社会の中で生きているように思える。以前この作品を学習したとき、ある生徒がこの作品に関わって次のような思いを語った。

『小さい頃、私はどちらかと言うと「いじめられっ子」でした。幼稚園の年長組の時、私はA町に引っ越してきました。前の幼稚園ではみんな仲よく遊んでいたけど、A町の幼稚園ではどうもなじめずいつも一人でした。小学校に入っても友達はずいぶんできず、数人の女の子にいじめられてきました。でも、クラスに一人私とよく似た「いじめられっ子」がいました。その子は、私よりもつとひどいことをされていました。でも、私はその子を見て「ああ、よかつ

た。私よりつらい子はまだいるんだ」ということを思い、その子がいじめられることで私は、ほっとした気持ちになっていました。私は今、そんな気持ちを持った自分がとても恥ずかしく、それ以につらい思いでいっぱいです。自分に何かできなかったのか、何もしなかった自分が、今とても情けないです。私はその子に一生謝っても許してもらえないことをしてしまったと思います。その子に対して私は何もしていないけど、私の心の中に大きな傷ができてしまいました。自分以下が欲しかったあまりに……。』

人は病気になると、もっと厳しい病気にかかっている人を思い、自分はまだあの人たちよりましなんだと思うように、人は常に自分以下を求めて生きているように思える。この「自分以下を求める心」を巧みに利用したのが部落差別であり、多くの人々がこの心に支配されているがために、部落差別をはじめとするさまざまな差別はなくなっていくように思う。人間として人間らしく生きるということは、私たちの心の中に潜んでいる自分以下を求める心と闘い続け、自分の幸せと共に仲間の幸せを築いていこうとする心を育てていくことだと考える。そして、この心が、いじめを生み、さまざまな人間の悲しみを大きくしていることをとらえさせ、この学習を通して、差別の本質を考えたいと思う。人として大切な生き方、人間らしい生き方とは何か。3年B組の話し合いを通して、このことを学校全体で考えたいと本主題を設定した。

③ ね ら い

差別の本質と自らの差別性に気づき、人間らしく生きるということを理解させ、常に真実を見つめ、同和問題解決に立ち向かおうとする意欲と実践力を身につけさせる。

④ 視 点 人権と差別

⑤ 指導計画

- (1) 常時指導 朝の学級会活動、帰りの学級会活動を教育活動の中心に据えた、すべての教育活動の中で人間の生き方や生きることを追求する営みを大切に、毎日の生活ノートの営みを核として、日々人間の生き方を語り合い、学級目標である「美しさを求めて生きる人生」を合言葉に共感と連帯の絆に支えられた学級集団をつくる。

(2) 関連的指導 道徳「峠」……………1時間

進路決定の瞬間を1年後に控えた中学3年、生徒一人一人の中にはさまざまな不安が胸にわきおこっている。この1年、人間としてどのように生きていくか、人間としてのあるべき姿を考えながら、主体的な生き方を自覚させるために、詩『峠』を一人一人の胸に刻みつける。

(3) 核心的指導 道徳「自分以下を求める心」……………2時間（本時2/2）

(4) 発展としての関連

特活「すばらしい生き方に学ぶ」……………1時間

同和問題学習の中で生徒一人一人がつかみ取ったもの、学び得たものをクラス全体で語り合い、人間としてよりすばらしい生き方とは何か、私たちが求めていかなければならないことは何かを確認し、生徒一人一人の部

落差別解消に取り組もうとする実践力を育てる。

(5) 常時指導（発展）

仲間の幸せの中に自らの幸せを見い出し、仲間の悲しみをみんなで幸せに変えていこうとする共感と連帯の絆を土台とし、人間を大切にする、人間を尊敬する教育をよりいっそう推進していく。部落差別の悲しみは人間の悲しみなんだという視点に立ち、家庭・地域社会において部落差別解消に取り組む態度と一切の差別を許さない生き方をすべての生徒の中に育てる教育を実践していく。

⑥ 本時の指導

(1) 目 標

自分以下のいない生き方とは、何であるかを考え、お互いの存在を大切に認め合い、心をかよわせることが、差別解消につながるということを理解させ、部落差別解消に向けて積極的に取り組む態度を育てる。

(2) 展 開

学習活動	主な発問と期待する生徒の反応	指導上の留意点
① 資料を読む。		・生徒自身の生活を見つめながら読んでいく。 ・最も心に響いた部分に線を引かせる。 ・できるだけ多くの生徒の発言も出させる。
② 最も心に残った部分について一人一人の思いを発表する。	○ 最も心に響いたところはどこか、それはどうしてか。 ・自分以下が欲しいがためにある子をいじめていったというところ。 ・努力しない人ほど他人のことをとやかくいうというところ。 ・今の自分以上をめざすという言葉。	
③ 自分以下を求める心について考える。	○ 自分以下を求める心とはどんな心だと思うか。 ・人を見下げたり、差別したりして、自分を優位な立場において、努力もせず自分はましなんだと思う心。 ○ 自分自身の生活の中で自分以下を求める心はないだろうか。 ・テストの点が悪いときなど、自分より	・自分自身の生活の中で思うことを出し合うようにする。 ・自分自身の中に自分以下を求める心はないかということを一人一人の意見を確かめながら、学級全体で考えさせる。

学習活動	主な発問と期待する生徒の反応	指導上の留意点
④ 差別の本質について考えさせる。 ⑤ 資料を通して同和問題学習のあり方について考える。	もつと悪い点の友だちのことを思っ て、努力もせず自分はまだましな んだと思ってしまう。 ・つらいときに自分よりもつと みじめな人を見て、自分をなぐさ めたり、その人をいじめたりする。 ○ 他の人が私をいじめたとき、 私はどうしてその間違いがはつき りわからなかったのだろうか。 ・私はいじめられることや差別さ れることが、恥ずかしいことであ るよう思い込んでいたから。 ・いじめたり、差別したりするこ とが、人間としていかに惜げない ことであるかということに気付い ていなかったため。 ○ 『自分以下を求める心』とい う資料が訴えていることは何か。 ・自分の中にある差別に気付いて いく生き方を訴えている。 ・本当の人間の生き方とは何かを 訴えている。 ・私たちのあるべき姿を訴えてい る。 ○ 自分の中にある差別心を洗っ ていくことはどんな意味があるか と思うか。 ・人間らしい生き方をつかんでい くことにつながる。 ・人の悲しみや苦しみがわかる人 間になることにつながる。 ・自分の幸せだけでなく、他の多 くのひと々を幸せにしていく生 き方につながる。	・自分の中に潜んでいる差別心 を通して自分以下を求める心につ いて考えさせたい。 ・いやなことを他の人に押し付 けていくだけでは差別の本質に気 づくことはできないし、自分自身 も差別者となっていくことに気 付かせたい。 ・特に、『自分以下を求める心』 の学習を全校生徒の前で、この1 年の同和問題学習のスタートとし て学習することの意味を考えさせ たい。

(2) 【授業記録】

主題 「人間らしい生き方を求めて」

(資料「自分以下を求める心」)

授業者 森口 健司

1991年4月30日(火)

板野中学校体育館

T 1 昨年1年間、2年生全体で、同和問題についての考えを深めていく授業に取り組んできました。その取り組みをより確かなものとしていくために、2年生のときは学年全体ということだったけど、今日は学校全体で同和問題の学習に取り組んでいきます。昨年の取り組みを学校全体の取り組みにしていくなためにも、みんなでこの1時間を充実した時間にしたいと思います。この時間は「自分以下を求める心」という資料について考えていきたいと思います。



この資料は佐藤文彦先生から紹介された資料です。この資料を通して、私たちの同和問題にかかわる生き方、人間としての生き方について考えていきたいと思います。それでは資料を読んでいきます。資料の一つ一つの言葉に心を込めて聞いてください。

(資料「自分以下を求める心」を読む。)

あれは、小学校二年生のことです。私たちのクラスに、よくいじめられる女の子がいました。私も、他の人たちと一緒に、いじめては笑っていました。その頃の私の気持ちは、「自分以下の存在が欲しかった」のだと、今になって気づきます。あの時のあの子が、もし自分だったらと思うと、今までいじめた人に対して、あやまらなくてはなりません。

自分をみがく努力もしないで、ただ自分以下がほしいだけでいじめるのは、やっぱり差別ですね。部落差別やいろいろの差別について、たくさんのことを勉強してきた私ですが、実際の生活ではそれをまるで生かしていませんでした。なんか今。考えてみると、「なぜあの時、あんなことをしたんだろう」と思ってしまう。

思っているだけ、悪いと知っているだけでは、すぐボロッとやってしまっ相手

を傷つけたり、がっかりさせたりしてしまいます。

どうして私はこうなんだろう。やっぱり、自分以下がほしいという気持ちが心の底にあって、それが作用しているのでしょうか。

私は、自分以下がいない人間になりたいです。そのために自分の生活にまじめにぶつからなくてはなりません。こう考えてくると、ひとのことを、とやかくいわない生き方は大切なことなんですね。立派な人の証明なんですね。身のまわりを見ても、努力しない人ほど、他人を傷つけたり、とやかく言ったりしています。まる

で魅力のない生き方ですね。その中に私もいるかと思うと、恥ずかしくなります。

自分以下などいらない生き方をつかむことが差別やいじめをなくすことだと、だんだんわかってきました。

学校でやっている「自分新聞」や「生活の記録」、これなども、何枚も何冊も挑戦している人は、他人のことなどイヤミをいっている暇はないですからね。

「今の自分以上をめざす」そのために全力で生きる。他人のことをとやかく言わないんだから、ほんとうに仲間として力が合わせられる。すてきなことです。

私たちは、得意もあれば不得意もあります。すべてをかつこよくやることはできません。なのに、人の小さな欠点を探し出して、いじめたり、自分をすぐれていると思い違いするのは、恥ずかしいことです。ねっ先生、とっても恥ずかしいことです。

私は今まで、人間として恥ずかしい生き方をしてきたのです。何べんも、何べんも、まちがったことをしました。だから、他の人が私をいじめた時、そのまちがいがはつきりわからなかったのです。

T。 どうですか。みんないろんなことを思いながら聞いてくれたと思います。この資料を読んでみんなの思うことを出し合って、生きるということについて考えていきたいと思います。みんなは今、どんなことをこの資料から思いましたか。

村山（男） 資料を読んでみて思うことは、自分自身全力を出して生きることはあんまりなかったということです。全力を出す生き方というのは大切なんだと思います。

松本（男） 僕は、今の自分以上をめざすという言葉が心に響きました。自分以下ばかりを求めているのでは、いつまでたっても人間として成長することはないと思います。また、自分以下を求める心は差別につながっていくようにも思います。人間として自分以上を求めて、生きることが大切なんだと思います。

井上（女） 私が一番心に残ったことは、一番最後の文章で、「他の人が私をいじめた時、そのまちがいがはつきりわからなかったのです。」というところです。何でかわからないけど、この部分はこの人の言いたいことがわからなくて不思議に思います。

園藤（女） 私は、「自分をみがく努力もしないで、ただ自分以下がほしいだけでいじめるのは、やっぱり差別ですね。」というところが一番心に残りました。努力も何もしないで、何かをする度に人を傷つけ、傷つけられた人も自分以下を求めて、また違う誰かを傷つけていったら、私も差別はずっとなくならないままだと思います。みんなで力を合わせて共に頑張っていくことが大切なんだと思います。

中山（女） 私もみんなと同じように、今の自分以上をめざすというところが心に残りました。自分以下を求めるのではなくて、今の自分よりもっともっとすばらしい自分をつくっていくということは、差別をなくしていくことにもつながると思います。私たちにも今の自分以上をめざすという気持ちが大切だと思います。

T。 今の自分以上をめざすということについて意見が出たんですけど、自分以下を求める心

について、みんなの考えを出し合って、みんなの思いを深めていきたいと思います。みんなは「自分以下を求める心」とはどんな心だと思いますか。「自分以下を求める心」という心についてみんなの考えを聞かせてください。

村山（男）自分以下を求める心というのは、それははつきり言って差別心だと思います。努力して、自分のしなければいけないことを確実に頑張れているときは、よい意味で相手のことを考えたり、思いやることができると思うんです。人間はどんなときでも、自分の生活に努力することを忘れてはいけないと思います。

中山（女）人間は、誰でも自分以下を求める心を持っていると思います。今の私だって、いけないことだとわかっていても、あの人よりはましだと思うと、気が楽になります。そんな心を利用してつくったのが部落差別だと思います。そして、今もまだ差別が残ってきているのは、私たちに自分以下を求める心があるからだと思います。

井上（女）私も中山さんと同じで、自分以下を求める心というのは、絶対誰の心の中にもあると思います。口では綺麗事を言っているけど、どこかで自分以下を求めて生きていると思います。自分以下を求める心というのは、優越感にひたったり、自分だけがよかったらという気持ちから起こってくるんだと思います。この心をなくしていくことは無理かもしれないけど、それについてみんなで考えていくことが、部落差別をなくす第一歩だと思います。

井上（男）やっぱり自分以下を求める心というのは、自分を安心させるために、自分がつくった心だと思います。

藤田（男）僕も井上君と同じ意見で、自分以下を求める心を持つことによって、安心感みたいなものができると思います。安心感のある生活を送りたいと思うから、自分以下を求める心が生まれてくるんだと思います。

T₄ 私自身、この自分以下を求める心が、いつも心の中を支配している。そんな気がしています。この資料は、佐藤文彦先生の講演の締め括りに紹介された資料なんですけど、佐藤先生はどんな思いで、この資料を紹介されたのかをみんなにもわかってほしいと思うんです。みんなの毎日の生活にかかわって、自分以下を求める心はどのように潜んでいるのかを考えながら、話し合いを深めていきたいと思います。

中山（女）私にも自分以下を求める心はあると思います。家庭のことや成績のことなど、自分以下の人をさがしていることがよくあります。そんなことでは駄目だと思っても、やっぱり思ってしまう。

T₅ 今の中山さんの意見についてどうでしょうか。

井上（女）学校とかでも、自分以下を求めていることがたくさんあって、たとえば、テストの番数とか返ってきたら、自分だけの番数がわかればいいことなのに、他人の番数とかを聞いて安心するところがあるし、今だったら体育の時間にスポーツテストとかがあるけど、走るときにしても自分が最後になるのは嫌だから、自分より遅い子と走りたいと思ってしまって、どうしても自分以下を求めることはあると思います。

T₆ さつき井上さんから、最後の文章が心に残ったと話がありましたね。「だから、他の人

が私をいじめた時、そのまちがいがはつきりわからなかったのです。」この部分についてみんなの考えを聞きたいと思います。どうしてわからなかったのか。みんなそれぞれに思うことを語ってください。

中羽（男）差別されている人より、差別している人の方が恥ずかしいということに気づいていなかったからだと思います。

井上（女）私も中羽君と同じで、差別されている人より、差別している人の方が恥ずかしいということが、わからなかったんだと思います。差別される人があるから差別があるのではなくて、差別する人があるから差別される人があるということが、差別しているときはわからなかったんだと思います。

T ♪ 今の意見についてどうでしょうか。

圓藤（女）自分が他の人をいじめたとき、悪いことをしていると思わなかったら、他の人もいじめているから、自分がいじめても別にかまわないと思っていじめてしまうけど、今度自分がいじめられると、何で自分がいじめられないのかと思ってしまって、自分の根本的な間違いに気がつかなかったから、どうして自分がいじめられるかという原因もわからないと思います。



松本（男）僕も圓藤さんと同じで、弱い立場の者がいじめられるのがあたりまえだと思っていたんだと思います。そして、その間違いが最初はわからなかったんだと思います。

T ♪ ここでみんなに聞きたいと思います。差別されることが恥ずかしいのか。差別されることが恥ずかしいのか。どっちか。手を挙げてください。差別されることが恥ずかしいと思う人。手を挙げてください。（誰も手が挙がらない。）それでは、差別することが恥ずかしいと思う人。手を挙げてください。（ほとんどの生徒が手を挙げる。）どうしてですか。今、差別されることより、差別することの方が恥ずかしいんだということで、手を挙げてくれました。どうしてそう思いますか。みんなの考えを聞かせてください。

井上（男）やっぱり、差別する方が恥ずかしいと思います。それは差別される人がいても、差別する人がいなかったら、差別は存在しなくなるからです。差別はする人があるから起こってくると思います。

村山（男）僕はどっちにも手を挙げなかったんだけど、それは一緒のことだと思います。僕は差別する方も心に大きな傷が残っていくと思うし、される方も心に大きな傷がつくと思うからです。

井上（女）私も井上君と同じで、差別する方が悪いと思います。それは差別するということは、

自分以下を求めるということで差別していくと思うんです。その気持ちは自分のつらさや苦しさには耐えられなくなって、自分より弱い立場の人を虐げ差別することによって、人を差別する人は、自分の苦しい気持ちやつらい気持ちを人をいじめることによって慰めていると思うからです。

T₉ 差別するということは、最も人間らしくない行為であるということかな。

井上（女）そうかもしれんけど、人間らしくないって言うたら、人間が完璧みたいだけど、人間は本当に弱い者だと思うんです。

T₁₀ 差別する方もされる方も、やっぱり人間のあるべき姿ではないように思うんです。どうでしょうか。今、差別される方が恥ずかしいのか。それとも差別する方が恥ずかしいのかとみんなに聞きました。部落問題学習に取り組んでいく中で、そのことは頭の中でわかっておりながら、実際の生活の中では部落に生まれたことを恥ずかしがっていく。部落を否定し、部落を恥ずかしがりながら生きている状況がある。そのことが口惜しくてならないんです。私たちは差別の本質や人間の真実をしっかりと見極めて生きていきたいと思うんです。日々の生活の中で差別するというのが、いかに人間として恥ずかしいことであるかをしっかりと受け止めることができる。そんな強い力を持ちたいと思うんです。みんなはどう思うでしょうか。

T₁₁ もう一つ話をします。部落に生まれたことを恥ずかしがる。またいじめられることを恥ずかしがる。差別を受けることを恥ずかしがる。そのことが自分の人間としての尊厳を大きく傷つけていることだとわかり、自らの生き方や生きざまに誇りを持って、差別の問題に対処していくことができたと思うんです。

T₁₂ 差別の本質というものをこの資料を通して考えたいと思って、この資料をみんなと考えていこうとしたんですけど、この「自分以下を求める心」という作品をみんなは、どのように読んでいったらうか。この「自分以下を求める心」という作品が我々に言いたいこと。また多くの人に訴えていること。問いかけていること。この資料を勉強していくことの意味について、みんなが思うことを出し合って、一人一人の考えを深めていきたいと思っています。

佐々木（女）自分以下がほしいために他人の欠点を探していくことが、自分をより惨めにしていき、人を差別することにつながっているんだと思います。

村山（男）この資料が訴えていることは、自分以下を求めながら生活していくことは、大変楽だけど、その生活の中では、全然進歩がなくて、結果として自分をより惨めにしてくことになると思います。そして、人を差別するということは、自分の人間性を傷つけていくことになっていくと思います。

中羽（男）人にはみんな弱いところがあると思う。その弱いところをお互いにカバーしながら生きるのが人間の生き方だと思います。

井上（女）私がこの資料から思ったことは、いじめられたり、差別されるということは、恥ずかしい気持ちが起こってきたり、つらい気持ちになることがあるかもしれないけど、絶対に

恥ずかしいと思わないで頑張っていかなあかんということです。この同和問題の学習は、差別されることを思うと、悲しくなってもうしたくないと思う人がおるかもしれんけど、これは絶対に逃げて解決する問題でないで逃げんと頑張っしてほしいと思います。

中山（女）この資料を読んでいろいろ考えたんだけど、自分以下を求める心はなくならないと思います。今までいろいろ勉強してきたけど、今でも私の心の中には、自分以下を求める心があります。今、この世の中に生きている人、すべての人の心の中に自分以下を求める心があると思います。

T₁₃ 中山さん、井上さんの発言に寄せて、思うことを語ってください。

園藤（女）私も、自分以下を求める心というものは、絶対なくならないと思います。私にもあるし、差別心というものも、完全に消滅させるということは、難しいと思います。それでも自分の心の中におしとめて、小さくしていく努力を毎日の生活の中でしていかなければならないと思います。そんな自分をコントロールした生活が送れるのが、本来の人間の姿だと思います。

漆原（男）僕も、自分以下を求めて生きる弱い心に打ち勝って、自分自身の差別心を洗っていくことは、自分自身を見つめていくことであり、友だちのことを心から考えていくことだと思います。

T₁₄ 自分を見つけて、友だちのことを考えて生きていく生き方、人間にはすばらしい生き方ができますね。でも、人間には自分以下を求めていくことがある。これははつきりあると思う。私自身を支えているのも、自分以下を求める心かもしれない。心の中に私より下の人がいたらどこかで安心する部分は絶対ある。しかし、私を支えているのはそれだけではない。今、漆原君が言ってくれたけど、私を支えているのは、はつきり言える。仲間なんです。自分の本当の思いを話すことができる仲間。この部分はおかしいんどこがうか。ここは間違っているのどこがうか。心の底にあることが言い合える仲間。そんな仲間の声がいっつもいっつも会えなくても、心のどこからか聞こえてきて、これでは駄目だと思う。もっと頑張らなと思う。佐藤先生からいただいたこの資料も、先生自身をいっつも励ましているように思うんです。また自分以下を求めていきよるなあ。努力することを忘れよるなあ。そんな気持ちがこの資料にかかわって思われてくる。もっともっと自分を鍛えていくこと、磨いていく努力をせないかんのだと思うんです。そんな思いにしてくれるのがこの「自分以下を求める心」という資料なんです。

T₁₅ 私たちには、自分以下を求める心や差別につながっていく心を洗っていく生き方をしていかなければならないと思うんです。私たちの内にあるそういう寂しいものを洗っていく。学習を通して洗っていく。それはみんなにどんな意味があるんだろうか。そのことを思うんです。どうでしょうか。こういった資料を学習する。自分の中にある差別心を洗おうとする。よりよく生きようとする。そのことってどんな意味があるんだろうか。みんなの思うことを出し合いたいと思います。このことは言い替えたら、同和問題の学習をすることの意味につながっていくと思うんです。みんなの思うことを出し合っほしいです。

中山（女） いつも思うことなんだけど、部落差別という差別の問題は、とても奥深い問題だと思います。今日のこの資料で終わりということはないし、いろいろな資料を通して繰り返し繰り返し、自分にとって差別とはどのようなものなのかを学び続けなければならないと思います。

井上（女） 私は最初、部落差別について勉強するということは、部落の人とためにやっていると思っていたけど、今、考えてみると差別について勉強することは、その差別されている人のためにするのではなく、自分のためにやっているということがわかってきました。やっぱり結局差別をしているのは自分たちの差別心なんだから、それをまず洗っていったら、自分もきれいになった時に、世の中も変わっていくと思うんです。自分のために頑張らないかんという思いで、これからもこの授業に自分をぶつけていきたいし、頑張っていきたいと思います。

久保（男） 僕も、この資料を毎日の生活の中で思い続けて、自分以下を求める心を洗っていく努力を続けていきたいと思っています。

加藤（女） 自分以下を求めていくことは、差別につながっていくと思います。この心を洗っていくことが、差別をなくしていくことにつながると思います。

豊田（男） 自分の中にある差別心を洗っていくことによって、差別心をなくす勇気をできていくと思います。

森川（男） 自分の中にある差別心を洗うことによって、部落差別がどれだけ不合理かを理解し、部落差別だけでなく、他のいろいろな差別に対しても正しい考えができるようになると思います。

村山（男） この資料を生きる支えとして、差別心を洗っていくことによって、これからの生活においても、自分の心は変わっていくと思います。そして、自分以下を求める心も、これからどんどん小さくなっていくような気がします。そのためにこのような学習を継続してやらなければならないと思います。

松本（男） 僕は、やっぱり差別心を取り除かないかんと思います。しかし、自分以下を求める心は、絶対になくならないと思います。だけど、差別に立ち向かい、少しでもいいから、自分以下を求める心をなくしていく努力が大切だと思います。

藤田（男） 差別はそう簡単になくなるものではないと思います。でもどんなことがあってもなくさなければならないと思います。

T16. 差別は簡単になくなるものではない。だから頑張る力も大きい。この学習は、繰り返し繰り返し徹底的にやらなければならないと思う。そんな気持ちでいっぱいです。昨年、板野中学へ赴任してきて、この板野中学校に対する熱い思いをいっぱい持って1年間仕事をしてきました。この体育館も、私にとって本当に思い出深い場所なんです。教師になった1年目、この体育館で講演会があるということで、この体育館に10年前初めてきたんです。そのときの講演が、この資料を紹介してくださった佐藤文彦先生の講演だったんです。私はこの体育館で初めて佐藤先生と出会ったんです。確か、この辺り、前から2番目の席に

座っていたと思います。ある意味でこの体育館は、私の同和教育に対する瞳が大きく開けてくれた私にとって、忘れられない場所なんです。そんな思いの中で昨年1年、共に同和教育に自分のすべてをぶつけて頑張ってくれる先生方と出会えて、学級という枠を越え、学年全体で同和問題の学習に取り組んできました。今年は学校全体で昨年の取り組みがスタートしました。全校のすべての仲間の見つめる中で授業をやって、みんなの中にまた新たな思いが沸き起こってきていると思います。その思いを語ってもらって授業を終わりたいと思います。

中羽(男) 僕は1年生、2年生、3年生、そして先生方と共にこの教育に頑張っていけたらすばらしいと思う。差別される人が恥ずかしがることでない、差別する人が絶対恥ずかしいんだと思う。そんな差別をしている人の気持ちを僕は変えていきたいと思っています。差別をなくしていくために、一人だけの力では何もできない。だから、この問題を解決するために一人でも多く仲間をつくっていききたいです。

T₁₇ 一人一人の力は弱い。でも一人が立ち上がり、二人三人と仲間が増えていけば、その力は確かなものになっていく。そのためにまず私たち一人一人の頑張りを大切にしていきたいと思うんです。

井上(女) 公開授業というのは、昨年1年間ずっと私たちの学年だけの取り組みだった、今の1年生とか2年生とかは全然やっていなかったんだけど、今日1年生や2年生が私たちの授業を見てどう思ったかはわからないけど、私たちの学年は、この公開授業という取り組みを通して、何倍も成長したし、私たちの本当の気持ちを自分の意見として心から訴えて、同和教育に真剣に取り組むようになってきたんです。やっぱりこんなことをしてくれる3年の先



生方はすごいと思います。私たちは今の1年生とか2年生の先生方にも頑張ってもらって、今度は、1年生とか2年生とかの間での取り組みにしていきたいです。今度いつか私や3年生に1年生とか2年生の授業を見せてほしいです。

中山(女) 井上さんと同じように、中羽君も言ったけど、1年生や2年生の人とかがどんな考え方を持っているとか。私たちの発表を聞いてどう思ったかを聞きたいと思っています。それで、いっぱい資料を勉強して、もし間違ったことを言っているような大人やそういう人がいたら、それは間違っているときちんと言えて、本当のことが訴えていけるようにみんながでいっぱい勉強していかなあかんと思います。

T₁₈ 終わります。

(3) 【資料】

美しさを求めて生きる人生を

少年の頃の話をする。人には皆少年の頃がある。今の私にとって少年の頃は何であつたかと思うことがある。何か困難にぶつかった時に、すぐ少年の頃を思い出す。その思い出が困難を乗り越えるエネルギーになる。またエネルギーになってきた。たとえば、困難にぶつかって、ずっとけるそして倒れる。その倒れ方が大きければ大きい程、跳ね起きる力も大きい。倒れ方が大きい程、大きなバネとなって、大きく立ち上がることができた。同和問題に取り組むようになったのもそうであつた。

この世の中で、正しいことを貫いていくためには、間違いと闘っていかなければならない。決して間違いにはついていけない。たった一人になっても、間違いにはついていけないという抵抗の精神がいる。

小学校6年の頃であつた。夕食の時に母は私に言った。「今夜は、第二人にしか食べさせることができない。それだけのご飯しかない。」非常に貧しくて、その晩のお米がなかった。やがて、第二人が遊び疲れて帰って来て「ご飯……」と言った。食卓には二人分のご飯しか置いてない。二人の弟が言った。「お母ちゃんとお兄ちゃんは食べんの？」と言うから、小学校6年の長男である私は、とつさに、「先に済んだよ、二人で全部お食べ。」と言った。腹を空かして帰ってきた弟たちのおいしそうに食べる姿をみた時、私は自分の空腹に打ち勝つことができた心地よさをしみじみ味わった。自分のことより、人のことが先にということが、どんなに私を満足させてくれるものであるかを知った。

また、ある夜の食卓に、母が魚の煮付けを出してくれた。30センチぐらいの魚で四角に切って、頭の方が私、尻尾の方が弟。私はあまり魚が好きでなかった。その上、頭の方がおいしいという人もいるが、魚ぎらいの私には、頭の方は食べるところがあまりない。尻尾の方が欲しかった。ところが、母は弟の方を向いて、「頭の方は、お兄ちゃんだ。お兄ちゃんは頭の方だ。おまえたは弟だから尻尾の方だ。」そう言った。

弟たちは、身のたくさんある尻尾の方を喜んで、おいしそうに食べていた。

やがて、その弟たちが大人になった時、もちろん、私も大人になっている。その時、弟たちが少年の時の頃を思い出して言った。

「『あなたは弟だから』そんな言い方で、おいしい尻尾の方を私たちにくれた。」

いつも、そうであつた母の教育が、私たち兄弟を他人から見ると、とても羨ましい仲のよい兄弟にしてくれた。また、そんな母の教育が、兄弟仲よく助け合っていく生き方をさせてくれた。今も、亡くなって25年になる母に、私は感謝している。

わたしが、同和教育に必死になって取り組むようになった原因は、一人の教え子が差別によって殺されたからです。それはもう20年も前のことです。

ある夜、一人の教え子が私の家を尋ねてきた。彼は結婚して間もない頃だったのに、しょんぼ

りしてやってきた。そして、私に、「先生、私は中学校の頃、いい生徒でしたか。悪い生徒でしたか。」と尋ねる。その子は、友達が、「先生、あのなあ。」と言って私のところへ攪り寄ってくる。そんなようすを黙ってニコニコしながら見ているような子供でした。勉強の方は普通でした。掃除の時は、みんなが掃除をしなくても黙って掃除を続けてきた、そんな子供でした。

「君はよい子だったよ、君のしていたことは、眼を閉じると、今でも昨日のここのように思い出す。」と答えると、彼は「ああ、そうですか。」と力のない返事をしながら、静かに、「ありがとうございました。」と言って帰って行った。

その教え子のようすが、心に引っ掛ってたまらない。そんな数日間を過ごした時、自殺したという報が私に入ってきた。結婚してしばらくたって、部落出身であることを暴かれ、生きる望みを失って死んだということだった。

私は、「しまった！……」と思った。私がもう一言、「どうしてなのか？」と聞いてさえいれば、死なずにすんだのではないかと思った。

また、もう一つ私がどうしても忘れることができないことは、その当時私は、その子とその子を取り巻くクラスの子供たちに同和教育を語っていなかった、同和教育をしていなかったことだ。私が、同和教育をしていなかったために、同和教育を語っていなかったために、一人の教え子の生命が奪われた。私が教え子を殺したんだという胸の痛みは、年ごとに大きくなっていった。このことがあってから同和教育は、生命なんだということを思い知らされた。

少年の頃の日々、世の中に対する反抗心をむらむらと燃え上がらせて、生きてきた私は、この教え子の死を境にして、同和教育に取り組む決意をした。同和教育に取り組む決意をした私は、その後、さまざまな理由をつけて、同和教育を反対する多くの人たちに出会った。しかし、私は決して負けなかった。部落差別が、人間の生命にかかわる問題であることを胸の痛みとして知っているから、決して負けなかった。私に同和教育反対などという人間によって、私の教え子が殺されたんだという怒りに震えて、私は徹底的にその人たちと闘ってきた。私は、今まで大切な教え子たちに、部落差別と闘って生きることを教えていなかった。そのために教え子を死なせてしまった。私は、それ以後、教え子と共に闘い、共に生きることを決意した。

これから難しい話をする。みなさんが難しい話は聞いてくれないと考えることは、みなさんを尊敬することにならないから、あえてその話を優しくつくりかえない。私が話す言葉を頭でなく、身体で聞いてください。頭で考えてもわからない。身体全体を耳にして、身体全体を眼にして、心で聞いてください。それでもわからない時は、身体に刻みつけてください。みなさんを信じるからこそ、尊敬するからこそ、難しい話をする。

人間というものはさまざまな差別と向かい合って、たとえ差別することがよくないと知っていても、よくないと知る知恵で、さらに巧妙な差別を考え出す。なぜ、人間はそんなことをするのか。それは、人を差別することは、自分自身を差別することになることに気づいていないからだ。この世の中から、部落差別がなくなった時、より幸せになれるのは、差別される人か、差別する人か、どちらだろうか。私は、差別する人こそ、より幸せになれると信じる。なぜなら、差別が

なくなった時に、差別する人の中にある差別するという心の重荷がなくなるからだ。

私は、差別の中を生きる人々と共に生き、共に学んできた中で、人を傷つけることによって、人を傷つける差別によって、実は自分の生命を縮め、自分の魂を傷つけていることに気づいた。

そのことを一人の人間に例えて言う。頭で立っている人間も、頭で立っている私も、みなさんも、足に支えられていることを知らなければならない。

頭で人は立つだろうか。ある夜、死にたいという苦しみを抱いて、相談に来た一人の若者がいた。その時、若者に尋ねた。「死にたいと言っているのはどこか、どこが死にたいと言っているのか。」その時、若者はボカーンとした表情で私を見た。そこで私は手で頭をたたきながら、「死にたいと言っているのはここか。」と尋ねたら、若者はうなずいた。「頭の思いで死んだら、頭だけが死ぬか。」と、さらに続けて聞いた。

「頭だけの思いで死んだら手も死ぬでしょう。君は手に死んでもよいかと尋ねたか。」

「手だけではない、足にも相談しなくていいのですか。だいたい人間は頭でつかちだから、頭に近い顔の方ばかりを気にしている。」

「顔は、一日のうち何度も何度も気にして見る。だが、足の裏の方は、めったに見たことがない。足の裏を見る時は、水虫ができた時か、魚の目ができた時ぐらいだ。頭は足を無視している。しかし、足の裏は、全身の中で一番下で、主人にも感謝されないにもかかわらず、全身の重みを支えてくれている。」

「死ぬという一大事にいるのだから、せめて一度ぐらいは、足を見つめて感謝し、死んでもいいかと、了解を求めることぐらいしたらどうか。」

「足の裏を見つめ、足の裏よ。私は死にたいのだが、君は賛成か、反対かと聞いてみるんだ。」

足の裏が声を出して返事をしてくれることはない。しかし、足の裏にも知恵がある。それがなかったら、どうして主人に無視されながらも、全身の重みを支えて生きることができのだろうか。もし、足の裏が返事をしなかったら、それが聞こえるまで聞きなさい。それが人生なんだ。

つまり、頭の知恵だけで生きるのが人生ではなく、足の裏に気づき、足の裏に感謝できる本当の知恵を持つこと、それが人生なんだ。この話を、すぐに飲み込まないで、口にいっぱいためて、どんな味がするか味わってみて下さい。

私は、小学校の5年生の時、野球をしていて、友達と衝突して、右の足のお皿の下にある筋を切ってしまった。だから、私は、びっこです。小学校の5年生から、師範学校を卒業するまで、9年間、運動会が9回あった。運動会の度に、徒競走があるので、今年はサボってやろう、今年はサボってやろうと毎年思っていた。しかし、私は、いつも、ドッテンドッテンとびっこをひきながら、一番びりで、多くの人の前で、長い時間私の体をさらしながら生きてきた。9年間で9回の最後の運動会が済んだ時、「ああ、よかった。走り続けてよかった。」とこの頭がこの足に感謝した。これで私は日本一のびっこになれたと思った。私は、この頭の不注意のために足を傷つけてしまった。しかし、足は苦しいとも恥ずかしいとも言わないで、私の全身を支え、私の頭を支えてくれた。そのことに気付かない、この頭は、かつてに恥ずかしいと、足を恨んだことも

あった。

今、私は63歳、63年の人生を振り返るといろんなことがあった。私が悲しいこと、苦しいことに疲れ果てて、もうどうしようもない。そんな思いでいる時、私を励ましてくれたのは、差別の中を生きた人たちの魂だった。私は、いつも差別され、傷つけられてきた人たちの優しさと温かさに、支えられて生きてこれたように思う。

私の不自由な右足をかばうように、左足の太股は、右足の太股の倍近くある。左足の太股の太さは、怪我をしてから53年間、右足をかばいながら左足が生きて来た証拠である。

私は、右足についてまた一つ悲しい思い出がある。怪我をしてから、ちょうど1年、小学校6年生の体育の時間、不自由な右足が、跳び箱に引っ掛けて、右の手首を折ってしまった。父は、心配して私を病院に連れて行ってくれた。ところが、その翌朝心配してくれた父が、心臓麻痺で突然死んでしまった。私は、あまりにも突然な父の死に、びっくりしてしまって涙も出なかった。父の通夜の晩、近所のおばさんが私の姿を見て、「この子が、怪我をしてお父さんがびっくりして死んだんやな。」と言った。私は、この言葉を聞いた時、私が父を殺したんだと思った。その言葉を聞いた時、いつべんに悲しくなって、その夜は、まんじりともせず泣き明かした。そして、翌朝、すでに会葬場では、私たち母子を迎えてくれる会葬者の列ができていた。両側に並んでいる列の前を私は、包帯で右手を吊り、左手で遺骨を抱いて歩き、母はその後、弟もその後にならんで通った。その時白いハンカチがちらちら見えた。白いハンカチで涙を押さえているおじさんやお婆さんの「おお、可哀相になあ。」という声が聞こえた時、私は胸を張った。「昨日は何を言った。あんたが、おやじさんを殺したと言い、今日は、また可哀相やなあと言う。私は、決して可哀相な人間になりたくない。」と思った。父の遺体を運ぶ。その日の朝、母が、「お父さんが亡くなって、私たちの家は、お前が柱だ。お前が支えなんだ。」と言った。その母の言葉を思い出して、「なにが可哀相なんだ。可哀相な人間には、絶対になりたくない」と思った。

それから、母子4人は、口には言えない苦労の道を歩むことになる。ここに証拠がある。私は、ずっと、この頭で通してきた。山の小学校に赴任した時も、最後に鴨島一中に赴任した時も、私を知らない人は、この頭を見てニヤニヤする。私はその時、理由を言う必要も、下を向く必要もない。山の小学校に校長で赴任した時、私が散髪すると、子供たちが、「校長先生、きれいになった」と手をたたいて喜ぶ。なぜ、頭の毛を短くするのか理由はない。こうしたいからしている。

私が通っていた門司の小学校は、児童数1200人を越えていた。その1200人の中で私だけが髪をはやしていた。それは、父が元気な時、「坊ちゃん、坊ちゃん」と言われ、女中さんが二人も、三人もいる豊かな贅沢な暮らしをしていた証拠が、私に1200人いる子供の中で、一人だけ長い髪をさせていた。しかし、父が死んだのを境に、母親がバリカンで髪を切ってくれた。27歳の春まで母は、私の髪を切ってくれた。だから、この頭の中には、私の母がいる。私の父がいる。それを知らないで笑うものは笑え、人が笑ったからといって、ここにいる母や父を追い出したいはない。散髪にいく金がなかった。家でバリカンで刈られるのは痛い。今も、その痛さが懐かしい。

なぜ、そんな豊かな暮らしが、いつべんにそんなに貧しくなったのか。私の父が築いてきた家。

父はバナナの間屋をしていた。台湾から仕入れてきたバナナを九州から北海道まで売り捌いていた。しかし、父の死を境にして、33歳の母を女と思って、馬鹿にして男たちが何人も寄つてたかつて、父の店を乗っ取ってしまった。その乗っ取った男たちの策謀に抵抗するため、母は父が死んで49日も経たないのに、私たちの暮らしを守るために、その男と父の位牌の前で大喧嘩をした。しかし、ついに乗っ取られてしまった。私は、働かなければならなくなった。父が元気な時、私の顔を見て「なあ、坊ちゃん」と言っていた男たちが、父が死んで店と家が乗っ取られると「このガキ」と言った。「坊ちゃんという言葉は、私という人間に対して言ったのではなかった。お金のためか。」私は、はっきりわかった。私は、母が大喧嘩をしているのを階段の下でずっと聞いていて「ようし、敵を取ってやる。」と思った。

学校はよく休み成績は落ちた。門司のところから海を渡れば、下関がある。そこに市場がある。私たち親子は、小さな果物の店をしていくために、売る果物を小学校6年生の私が、朝、暗いうちに海を渡って仕入れてきては、店において学校へ行った。母が、体が弱かったため、どうしても学校を休まなければ、店番ができない日もあった。食べるものがない時もあった。そんな私を見て母は「すまん。」と言った。私は、母が心配してくれるその気持ちがよくわかったから、「ぼくは、もう中学校（旧制中学校）へ行くのはやめるから。」と言った。楽しみにしていた中学校への進学をやめて、高等小学校の二年間の道を選んだ。そんな私を見て母は「中学校へ行かないのだから、しっかり勉強しなよ。」と言って、私に、大人たち、青年たちが、私の学校で夜、勉強している夜学へ行かせてくれた。寒いある夜、母は、乏しい母の財布の中から、お金を出して「おなか为空くだろうから、帰りに焼き芋でも食べて帰り。」と言って、お金をくれた。私は、その夜の帰り焼き芋を買って弟たちに食べさせようと思って、懷に焼き芋をいれ走って帰った。

学校を休むことが多くなった。豊かな家で長髪にしていた頃の友達は、勉強がよくできる子、家がお金持ちの子だけだったが、私の生活が、苦しく貧しくなってくると、貧しい家の子、勉強が遅れている子、いつも先生に怒られて立たされている子が、私の友達になった。私は小さい頃から、家が貧乏で先生からよく叱られる子供たちの中に、本当の人間らしさがあることを身をもって知った。

家の仕事のために、学校を休むことが多かった。それは仕方のないことだった。しかし、月に一回だけその日が学校にいける日であるにもかかわらず、どうしても行きたくない日があった。それは、学校へお金を持っていかなければならない日だった。行きたくなくても休むわけにはいかない。前の日の夜、私は何と言いつつしようかと苦しかった。私は、いつも「忘れしました。」と言いつつ。一番うまい返答だった。そう言ったら、友達が横で「お前、ようわつせるのお。」と言いだし、また「今度も忘れるんだろう。」とも言った。けれども、先生は一言もそんなことは言わなかった。そして、何ヶ月か後の放課後、私を呼んで言った。「貧乏が恥ずかしいのか。貧乏を恥ずかしがるのが恥ずかしいのか。」と聞いた。「貧乏が恥ずかしいのではない。貧乏を恥ずかしがるのが恥ずかしいのだ。お前のお母さんはどうやって生きてきたのか。」と言って、こんこんと私に話をしてくれた。

ある日のこと、母が夜寝ずに作ってくれた手製のズボンをはいて学校へ行った。もちろん、格好は悪い。小学校6年のクラスの子供が笑った。私は、腹がたつてたまらないでその友達を殴りとばした。私は、63年間の長い人生の中で、人を殴ったのは、それが最初で最後であった。殴って、殴って殴り倒した。いくら、殴っても私の心は晴れなかった。ふと、気がつくとかくさんの友達が、ぐるっと私を取り囲んで、冷たい目で私をじろっと見た。その時、私はいつぺんに身体中の血が抜けてしまった。それがどうしてなのかわからなかった。

教師になって、同和問題を勉強し、水平社宣言を学んだ時、そのことが初めてわかった。自分が人を傷つけようとしたって、人は傷つけられることはない。人が私を傷つけても私は傷つかない。このことが、今までわからなかった。貧乏が恥ずかしいと考えていた私が、いくらお前は貧乏だと言われて馬鹿にされても、私はそのことによって、傷つけられることはないのだということを教えてくれたのは、同和問題の勉強だった。差別の中を胸はって生きる人々の姿だった。水平社宣言だった。

小学校6年生の先生は、酒井虎蔵と言った。その先生が、小学校を卒業する時、「100人のうち、99人走っても、たった一人お前は走るなよ」と言われた。その言葉を胸に私は、小学校を卒業した。その言葉を心の支えにして、私は一生懸命今まで生きてきた。小学校6年生から半分ぐらいの人が、中学校に行く。私は高等小学校にいった。私の高等小学校の仲間が、「ほれ見てみい。中学校にいつている人間は、偉そうにしている。帰りに待ち伏せてやっつろうか。」という声が聞こえた。私は止めた。「憎めないことをするな、相手を待ち伏せて殴って、自分が傷つくということに気がつかんのか。」私は必死に止めた。友達は私の言うことをわかってくれて、そのことはしなかった。高等1年生の時の先生は、滝本章夫という先生だった。私が先生になろうと思ったのは、その先生との別れの時だった。いろいろと事情があつて、母親の里の徳島へ帰るようになった。母が先生に、「お世話になりました。徳島の鴨島へ帰ります。」と別れを告げた時、先生は私の母にこう言った。「おかあさん、私には子供がないのでよかつたら、この子を預からせてもらえませんか。うちで預かつて、この子を先生にしたらどうですか。」と言ってくれた。私の母が、そんなことをすることはなかった。けれども、そんなことを言ってくれた先生の温かい心は、決して忘れることができない。私はその先生の言葉を大事にして、自分が先生になる決心をしたように思う。

私たち兄弟は、母子家庭で貧しい暮らしにあるということで、世間から冷たい目で見られるということが度々あつた。その度に、母は、世間の冷たい仕打に傷つきながらも、羽を広げて私たちを守ってくれた。そんな姿を見た時、私は母を虐めるような人間は絶対に許さないと思った。

私は、私の教え子、部落出身の教え子たちに、私が持ってきた私の母に対する思いを言い続けてきた。部落に生まれたことを恥ずかしがつて、親を傷つけてはいけないということを私は、必死の思いで言い続けてきた。「私がしてきた苦勞と、部落に生まれた君たちのお父さんやお母さんがしてきた苦勞を比べたら、月とスッポンぐらいの差がある。私が母子家庭と貧しさの中で育てて苦しい思いをしてきた。その何十倍もの苦しみを背負って、君たちを育ててきたことを忘れる

な。」と言って子供たちを励ました。

私は、世間を憎みながら、世間に反抗しながら、生きてきたのだが、やけを起こさなかった。なぜかと言うと、それは先生の温かい教えがあったからだ。それに、もう一つ、父が生存中大事にしてきた貧しい人々の優しさに支えられたからだ。父は、本当に心優しい人だった。バナナは、店先で売るやり方と、天秤棒を担いで売り歩くやり方と二つあった。天秤棒を担いで売る人は貧しい人が多い。バナナを買いに来て、付け根のところが黒くなって、ポロッと落ちる一番おいしいバナナ、けれども商品としては安い、そんなバナナを買っては、町を売り歩く。そのおじさんやおばさんたちに対して、父は「お金はいつでもいいよ。いいから持っておいき」と言っていた。私が店へ遊びにいくと、父はまだ物事のわからないような私を呼んで、「神様は、みすぼらしい姿に形を変えて、人間をためしにくるんぞ。」と言って、私によく話を聞かせてくれた。その貧しい暮らしの中に生きる人たちは、父が死んだ時、真っ先に私たちのところへ来てくれて、お父さんが生きておった時に借りたお金は、まだわずかしか返すことができないと頭を下げ、いろんなものを持ってきて、私たちを励まし支えてくれた。お金のある人は、もつとお金を増やそうと思って、母が一人でやっていこうとする店を乗っ取ってしまった。貧しい人たちは、「すまん。」と言って「ささやかですが……。」と言って、私たち親子に食べ物を持ってきてくれた。私は、冷たい世間を憎み世間に反抗しながらも、やけを起こさなかったのは、貧しい人たちの温かさがあったからだと心から感謝している。

私は、人を差別するような人間にはなりたくない。そのためには、どのような生き方をすればよいのか。私が、不自由な右足と生きてきたように、差別の中を生きる人々と共に、苦しみがら生きることが、私の生きる道だと思った。

鴨島第一中学校にいた時、部落差別のさまざまな苦しみ悲しみにあえいでいる子供を見て、何とか代わってやりたいと思った。しかし、私が代わってやることはできない。それならば、私の残された道は、その子供たちや親たちといっしょに苦しみながら、生きていくことしかない。私は、曲りなりにも、今日まで人間らしく生きたいということを目標に生きてこれた。それは、世の中の間違いと闘うことを自分の生きる証としてきたからだ。そんな暮らしの中で、独りぼっちになったこともあった。その時、しよげ返って、その独りぼっちの孤独感にあえいでいた時、亡くなった母がこう言った。「独りぼっちになることがいやだったらやめ。やめたらいいでないか。」と母が言って、その次に「独りぼっちになっているということは、お前が真実の道を生きているという証拠でないか。」と言って、私を叱りつけてくれたこともあった。

私は、人間らしく生きる。間違いを正しながら生きる。たった一人になってもその生き方がいい、そんな生き方がしたい。これが私の同和教育の喜びです。私は、私の大切にしている作品を私からのメッセージとして、みなさんに送ります。

「自分以下を求める心」

あれは、小学校二年生のことです。私たちのクラスに、よくいじめられる女の子がいました。私も、他の人たちと一緒に、いじめては笑っていました。その頃の私の気持ちは、「自分以下の

存在が欲しかった」のだと、今になって気づきます。あの時のあの子が、もし自分だったらと思うと、今までいじめた人に対して、あやまらなくてはなりません。

自分をみがく努力もしないで、ただ自分以下がほしいだけでいじめるのは、やっぱり差別ですね。部落差別やいろいろの差別について、たくさんのことを勉強してきた私ですが、実際の生活ではそれをまるで生かしていませんでした。なんか今、考えてみると、「なぜあの時、あんなことをしたんだろう」と思ってしまいます。

思っているだけ、悪いと知っているだけでは、すぐポロッと言ってしまつて相手を傷つけたり、がっかりさせたりしてしまいます。

どうして私はこうなんだろう。やっぱり、自分以下がほしいという気持ちが心の底にあって、それが作用しているのでしょうか。

私は、自分以下がいらない人間になりたいです。そのために自分の生活にまじめにぶつからなくてはなりません。こう考えてくると、ひとのことを、とやかくいわない生き方は大切なことなんです。立派な人の証明なんです。身のまわりを見ても、努力しない人ほど、他人を傷つけたり、とやかく言ったりしています。まるで魅力のない生き方ですね。その中に私もいるかと思うと、恥ずかしくなります。

自分以下などいらない生き方をつかむことが差別やいじめをなくすことだと、だんだんわかってきました。

学校でやっている「自分新聞」や「生活の記録」、これなども、何枚も何冊も挑戦している人は、他人のことなどイヤミをいっている暇はないですからね。

「今の自分以上をめざす」そのために全力で生きる。他人のことをとやかく言わないんだから、ほんとうに仲間として力が合わせられる。すてきなことですね。

私たちは、得意もあれば不得意もあります。すべてをかつこよくやることはできません。だのに、人の小さな欠点を探し出して、いじめたり、自分をすぐれていると思い違いするのは、恥ずかしいことですね。ねっ先生、とっても恥ずかしいことですね。

私は今まで、人間として恥ずかしい生き方をしてきたのです。何べんも、何べんも、まちがったことをしました。だから、他の人が私をいじめた時、そのまちがいがはつきりわからなかったのです。

※本資料は佐藤文彦先生が、徳島県中学校同和教育研究大会に向けて、同和問題学習に取り組んでいた阿波中学校の全校生徒に話をされた内容であり、「美しさを求めて生きる人生を」は、1988年元旦に佐藤先生からいただいた年賀状に記されていた言葉である。